

備前市埋蔵文化財調査報告 6

北大窯跡・西大窯跡調査概報

2006

備前市教育委員会

備前市埋蔵文化財調査報告 6

北大窯跡・西大窯跡調査概報

2006

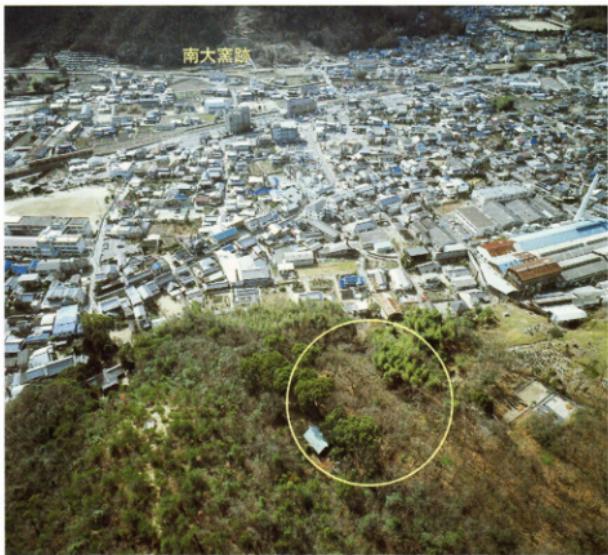
備前市教育委員会



1. 西大窯跡上空から伊部中心部を見る



2. 西大窯跡上空（東上より・矢印窯跡）



3. 北大窯跡（北上空より）



4. 北大窯跡上空（西上より）

序

本書は、岡山県備前市伊部に所在する市指定史跡「備前北大窯跡」・「備前西大窯跡」について基礎的な調査をした結果を収載しています。この調査の目的は、北・西大窯跡で表面採取した焼物や江戸時代の文献を通して現在までの知見を整理し、現地で窯位置の測量などを実施することにより、その遺跡としての価値を明らかにすることです。

ご存知のように西大窯跡・北大窯跡は、ともに近世の備前焼を代表する大窯で、国指定史跡「伊部南大窯跡」同様、連綿とした備前焼の歴史の中で重要な遺跡であることは今までありません。

調査地点の備前市伊部の一帯は古くより焼き物の産地として知られており、現在でも多くの窯元や作家がその伝統を受け継いでいます。伊部の地を散策すれば、神社の宮獅子、店先に置かれた布袋などの細工物・人形德利などこれら三大窯で焼かれた製品を現在でもみることができます。

当教育委員会では、平成11年度から継続的に国指定史跡伊部南大窯跡の調査を進め、史跡地周辺で平安時代から明治までの間で合計8基の窯跡を発見するとともに、昨年の調査で指定地内の東側窯が巨大な地上式の窯で、何度もつくりかえを行っていることを確認しました。それに対して未調査である北・西大窯跡についても基礎的な資料の収集・調査を行い、その成果をもとに今まで以上に史跡の保護・活用に結びつくよう計画しています。

本書に収められた成果が、文化財の保護・保存、今後の歴史研究、地域の歴史を深める資料として少しでも寄与できれば幸いです。

最後になりましたが、文化庁、史跡伊部南大窯跡整備委員会、岡山県教育委員会、ならびに地元の関係各位から賜りましたご支援とご協力に対しまして、厚くお礼申し上げます。

平成18年3月

岡山県備前市教育委員会

教育長 正宗洋三

例　　言

- 1 本書は備前市指定史跡「備前北大窯跡」、同史跡「備前西大窯跡」の現況の概要をまとめた報告書である。
- 2 「備前北大窯跡」は備前市伊部1099-2ほか、「備前西大窯跡」は備前市伊部1033・1035ほかに所在する。
- 3 現地調査は平成16年7月1日、平成17年11月28日、平成18年2月2日の3日間実施した。
- 4 調査は石井啓が担当した。
- 5 本事業を進めるにあたっては、文化庁文化財部記念物課主任文化財調査官坂井秀弥氏、岡山県教育庁文化財課総括副参事平井泰男氏から指導およびご助言を賜った。記して深甚の謝意を表したい。
- 6 報告書の作成にあたっては、史跡伊部南人窯跡整備委員会より指導および助言を賜った。明記して感謝の意を表したい。
- 7 現地の測量は柳かんこうに委託し、実施した。
- 8 報告書の作成は、備前市教育委員会埋蔵文化財作業室において平成17年度より隨時実施し、石井が担当した。執筆・編集・遺物写真は石井が行った。
- 9 遺物の実測・トレースは、入江津々美、草加尚子、松末左知子が行った。
- 10 本事業は平成17年度国宝重要文化財等保存整備費補助金をうけて実施した。
- 11 航空写真については、㈱フジテクノに委託した。
- 12 調査および報告書の作成にあたっては、以下の方々・機関にご指導・ご協力を賜った。記して感謝の意を表する。

岡山県教育庁文化財課 伊藤晃氏 上西節雄氏 上西高登氏 亀山行雄氏 重根弘和氏
杉木勇氏 中村慎一郎氏 乗岡実氏 日幡行雄氏 山下譲治氏

凡　　例

- 1 本書に用いた高度は海拔高であり、北方位は磁北で示している。
- 2 本報告書に掲載した遺物図面の縮尺は、基本的に次のように統一している。
遺物　土器：1/4・1/8
- 3 本報告書で用いた土色の標記は『標準土色帳』（農林水産省・農林水産技術会議事務局監修、財團法人日本色彩研究所監修）に従っている。
- 4 本報告書に掲載した遺物番号は、西大窯跡を1～、北大窯跡を101～の連番としている。
- 5 本報告書の第1図・図面1・図面2に使用した地図は、備前市作成（昭和63年）の1/10,000の「備前市全図No.4」・1/2,500の「備前市地形図4-6・5-5（平成14年修正測量）」を複製・加筆したものである。
- 6 本報告書の近世擂鉢の編年観は乗岡実2002「近世備前焼擂鉢の編年案」『岡山城三之曲輪跡』岡山市教育委員会などに依拠している。

目 次

卷頭図版	
序	
例 言	
凡 例	
目 次	
第1章 位置と環境	1
第1節 位置と環境	1
第2節 伊部南大窯跡の位置と備前焼	2
第3節 北大窯跡と西大窯跡	2
第2章 調査の経緯	4
第1節 調査の経過	4
第2節 調査および概報作成の体制	4
第3章 概要	5
第1節 北大窯跡の概要と表面採取遺物	5
第2節 西大窯跡の概要と表面採取遺物	6
第3節 文献資料と絵図	7
第4章 まとめ	9
観察表	10

図面・図版目次

図面・図版表紙

1. 西大窯に良好に残存する窯跡
2. 北大窯の物原
3. 嘉永元年の絵図に描かれた南大窯

図面1 北大窯跡図

1. 北大窯跡・西大窯跡位置図
2. 備前市指定史跡「北大窯跡」現況図

図版1 北大窯跡写真

1. 嘉永元年の絵図に描かれた北大窯跡
2. 北大窯跡

図面2 西大窯跡図

- 北大窯跡・西大窯跡等位置図
- 備前市指定史跡「西人窯跡」現況図

図版2 西大窯跡写真

- 嘉永元年の絵図に描かれた西大窯跡
- 西大窯跡

図面3 北大窯跡遺物図1

図版3 北大窯跡遺物写真1

図面4 北大窯跡遺物図2

図版4 北大窯跡遺物写真2

図面5 西大窯跡遺物図1

図版5 西大窯跡遺物写真1

図面6 西大窯跡遺物図2

図版6 西大窯跡遺物写真2

図面7 西大窯跡遺物図3

図版7 西大窯跡遺物写真3

報告書抄録

表 目 次

表1 窯闘連文献一覧	8
表2 北大窯跡遺物観察表(1)	10
表2 北大窯跡遺物観察表(2)	11
表3 西大窯跡遺物観察表(1)	11
表3 西大窯跡遺物観察表(2)	12

挿 図 目 次

第1図 南大窯跡・北大窯跡・西大窯跡位置図	1
-----------------------------	---

第1章 位置と環境

第1節 位置と環境

備前市は、岡山県南東部、兵庫県との県境に位置している。平成17（2005）年3月22日、吉永町、日生町と合併し、現在「海とみどりと炎のまち」新備前市としてまちづくりが進められている。市域の北部、吉永地域は兵庫県佐用郡に接し、北は美作市に接する南北に長い地域である。吉永地域は流紋岩土壌であるが、標高539mの八塔寺山は石英粗面岩の残丘である。和意谷には、国指定史跡「岡山藩主池田家墓所」が所在する。市域の南東部日生地域は、東は兵庫県赤穂市、南は瀬戸内海に臨む。階段状に降下する山々が直接海にいたる典型的な沈降海岸の地形で、冲合いには鹿久居島、頭島、大多府島、鶴島などからなる日生諸島が展開する。地質は流紋岩類で、砂浜は少なく、岩が切り立った海蝕崖が多く見られる〔谷口澄夫ほか1996〕。日生諸島最大の鹿久居島には、中世の集散地遺跡と考えられる「千軒遺跡」が所在する。

旧備前市域の西部、香登から新庄にかけては吉井側左岸にあたり、沖積平野が広がり、低丘陵上には国指定史跡丸山古墳をはじめとする古墳群が点在している。旧備前市域の中部から東部の伊部から三石にかけては急峻な山並みが続き、平坦地が谷に沿って細長く開ける埋積谷と呼ばれる地形が展開し、片上には西日本の縄文時代中期末の集落遺跡として著名な長綱手遺跡が所在する〔亀山行雄1993・2005〕。



第1図 南大窯跡・北大窯跡・西大窯跡位置図

山地は市の総面積の約2／3以上をしめ、その地質は流紋岩や石英斑岩で、花崗岩地域にくらべ樹木が再生しやすく、アカマツ林が広く発達している。この流紋岩から生成される山土や堆積した「田土」などは備前焼の原料粘土として使用される。この豊かな山林資源、原料の粘土、水運に恵まれた立地などが、中世以降、窯業史を飾る備前焼を生み出すことになる〔岡山理科大学2002〕。

第2節 伊部南大窯跡の位置と備前焼

備前焼を代表する遺跡である伊部南大窯跡群は、JR赤穂線伊部駅の南約200m、樅原山山麓の北向きの斜面に位置する。この地点から南側には伊部の町並みが広がり、その中央を東西に国道2号線が横切り、現在では近畿圏と山陽地域を結ぶ大動脈として車が頻繁に往来している。伊部の北部、不老山を山陽新幹線がトンネルで抜けると、その西には12世紀代にはすでに存在し、江戸時代に熊沢藩山の提案で津田永忠が改修した備前市内最大の池「大ヶ池」が広がる。

伊部の町の南端に位置する伊部南大窯跡は、周知のように備前焼の長い歴史の中で、窯の規模や操業期間の長さに関して国内では例のない貴重な窯跡であり、窯業史上貴重な遺跡であるとして昭和34(1959)年、国の史跡指定を受けている〔文化庁文化財保護部史跡研究会1991〕。

また、近年の調査で伊部南大窯跡の周辺に合計8基もの窯跡が確認されている〔備前市教育委員会2003〕。各窯の時期も平安時代前半から明治時代と幅広く、備前焼が連綿とこの地点で焼き継がれたことがあきらかになりつつある。

市域の南西部、伊部南大窯から直線距離でほぼ真南約5km付近の佐山地区は、瀬戸内市長船町に隣接し、歴史的には中国地方最大の須恵器窯跡群である邑久古窯跡群の北東端に位置する。佐山では遼くとも7世紀末ごろには生産が開始され、奈良時代に最盛期を迎え、平安時代後半まで続けられるが、その後はこの地で生産がされなくなる。それに呼応するかのように伊部の地で本格的に備前焼の生産が開始される〔間壁忠彦1991〕。

平安時代末、西の山窯跡や大ヶ池南窯跡など伊部の山麓で生産が開始された備前焼は、鎌倉時代ごろになると山の中腹に立地することが多くなり、南北朝期にはさらに高度をあげ、標高400mをこえるような熊山山頂に位置するものもある。南北朝末ないしは室町時代はじめ頃、ふたたび窯は山麓に築かれるようになる。規模も山崎古窯跡の幅2.5m、推定全長20m〔重根弘和2002〕、不老山東口窯跡の幅3.4m、推定全長40mとなり〔河本清・葛原克人1972〕、窯の巨大化、量産化を指向する。その後16世紀後半のある段階で、山麓に点在していた大窯は北大窯、西大窯、南大窯へ集約されることになる。

第3節 北大窯跡と西大窯跡

1. 北大窯跡

備前北大窯跡は、JR伊部駅の北約0.4km、不老山の南西の緩斜面に所在する中世から近世にかけての窯跡群で、昭和46年10月6日に備前市の史跡として指定された。忌部神社の西側緩斜面に2基の窯跡が南北方向に並存している。そこから南側50mほど下った地点、天津神社から忌部神社への参道

によって切られるかたちでもう1基の窯跡が所在する。この窯跡は市の指定範囲から外れている。樹木が伐採された現況では2基の窯跡が確認できるが、以前は計4基の窯跡群と考えられていた。

略測では、北側の窯跡が全長30m弱、幅3.5~4.5m、勾配20度である。一説にはこの窯を「応永の大窯」と呼び、築窯を室町中期とみるむきもある。その南側の中央の窯跡は確認できる全長は23m前後、幅約5m、勾配17度で中世末ないし近世初頭の成立と考えられている。参道をはさんで、いちばん南側の窯は、南東隅部の窯壁が露出しているが、全長20m以上で、地形の凹凸からは35m以上と推定できる。幅は4.5m、勾配は13度で、文政元（1818）年築かれたといわれている〔備前市文化協会1998〕。いずれの窯跡も焚口を西側に配しているが、地形測量、発掘調査がなくなされていないので、その構造、規模、築窯時期についての詳細は不明である。北大窯跡の廃窯の時期については、明治6（1874）年である〔岡上為右衛門1925〕。

2. 西大窯跡

備前西大窯跡は、JR伊部駅の北西約1km、医王山の東側山麓の緩斜面に所在する近世の共同窯で、昭和51年3月21日に備前市の史跡として指定された。備前西大窯跡は、国指定史跡伊部南大窯跡と同様、中世末に築窯された大窯といわれているが、発掘調査がなされていないのでその実態は不詳である。過去の踏査や研究者の調査によると、室町時代から江戸時代にかけて合計8基の窯が築かれていたという。北側から南側に向かって、室町中期の応永年間の窯、桃山期2基、室町末期の西大窯1基、江戸期4基が、いずれも焚口を東に向けて、並んでいたという。しかし、第二次世界大戦中に耐火煉瓦会社が、大量の陶片を煉瓦の原材料にしたとき、窯跡も相当部分破壊されたといわれている〔桂又三郎1977〕。

現在、市の指定史跡地内に確認できる窯跡は、全長40m弱、幅4.5~5m、勾配15.5度、焚口を東に向かた1基のみである。この窯跡から北側25mの地点に、平行する形で東西方向に凹面が観察できるので、やや小規模な窯跡がある可能性が高いが、樹木が繁茂していて、観察が出来ない。

ちなみに西大窯の呼称であるが、南は南大窯、北は北大窯と呼ぶのに対し、西は西大窯と呼ばず、最近まで「ヒガマ（日窯）」と呼ばれていた。

【引用文献】

- 岡上為右衛門1925『備前陶窯誌』大塚工藝社
岡山理科大学2002『岡山学』研究会『備前焼を科学するシリーズ『岡山学』1』古備人出版
桂又三郎1977『応永窯と海揚り古備前』備前焼研究所
亀山行雄1993『岡山県備前市長瀬手遺跡』『日本考古学年報』46 日本考古学協会
亀山行雄2005『長瀬手遺跡』『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告189』岡山県教育委員会
河本清・葛原克人1972『不老山古備前窯址』『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』岡山県文化財保護協会
重根弘和2002『山崎古窯跡』『岡山県埋蔵文化財報告』167 岡山県教育委員会
谷口澄大・石川寛監修1996『岡山県風土記』旺文社
備前市教育委員会2005『伊部南大窯跡周辺窯跡群確認調査報告書1』備前市埋蔵文化財調査報告5
備前市文化協会1998『わがまちの文化遺産』記念誌編集委員会
文化庁文化財保護部史跡研究会1991『國説日本の史跡第8巻近世近代2』紀行社
間壁忠彦・間壁茂子1966、1966、1968、1984『備前焼研究ノート（1）～（4）』『倉敷考古館研究集報』1、2、5、18
間壁忠彦1991『備前焼』『考古学ライブリー』60 ニューサイエンス社

第2章 調査の経緯

第1節 調査の経過

- 平成16年6月9日 坂井秀弥主任文化財調査官に追加指定方針について指導を受ける。
- 平成16年7月1日 西大窯跡、北大窯跡の窯跡について平板で略測を行う。
- 平成17年3月18日 史跡伊部南大窯跡保存整備基本構想策定。
- 平成17年3月22日 坂井秀弥主任文化財調査官に現状報告、指導を受ける。
- 平成17年11月28日 (株)かんこうに委託し、北・西大窯跡の測量を実施。
- 平成17年12月2日 坂井秀弥主任文化財調査官に現地にて指導を受ける。
- 平成17年12月3日 平成17年度第1回史跡伊部南大窯跡整備委員会で指導を受ける。
- 平成18年2月2日 (株)フジテクノに委託し、北・西大窯跡の航空写真を撮影。
- 平成18年2月24日 平成17年度第2回史跡伊部南大窯跡整備委員会で指導を受ける。

第2節 調査および概報作成の体制

調査および概報作成は以下の体制で行った。

平成17年度史跡伊部南大窯跡整備委員会

委員長 河本 清 くらしき作陽大学食文化学部 教授

副委員長 長尾清一 備前市文化財保護審議会 委員長

委員 間壁忠彦 倉敷考古館 館長

西村 康 (財)ユネスコ・アジア文化センター文化遺産保護協力事務所研修事業部長

故)葛原克人 ノートルダム清心女子大学文学部現代社会学科大学院人間生活学研究科教授

肥塚隆保 奈良文化財研究所埋蔵文化財センター保存修復科学研究室 室長

指導・助言 坂井秀弥 文化庁文化財保護部記念物課主任文化財調査官

成本俊治 岡山県教育庁文化財課文化財保護班総括主幹

平井泰男 岡山県教育庁文化財課埋蔵文化財班総括副参事

備前市教育委員会

教育長 正宗洋三

教育次長 杉原慶悟

生涯学習課

課長 谷口富祥 課長代理 末長章彦

文化係長 石井 啓 (調査・整理担当) 文化係主任 福本浩子 (調査補助・総務担当)

備前市歴史民俗資料館 学芸員 岩崎紅美

非常勤臨時職員 入江津々美 草加尚子 松末左知子

第3章 概要

第1節 北大窯跡の概要と表面採取遺物

本節は平成17年に実施した測量結果と地形観察をもとに北大窯跡についての知見をまとめたものである。その際、平成13(2001)年に表面採取した遺物を図化することにより、築窯時期の推定資料とした。

1. 北大窯跡の概要

北大窯跡は不老山（標高213.5m）の南斜面に位置している。この場所は不老山山塊から北側に張り出した宮山（標高82.7m）の西側斜面にもあたる。北大窯跡は、標高40mから50mの範囲、忌部神社の社叢を中心に所在する。

北大窯跡は、現況では3基の窯跡からなる。忌部神社〔註1〕の西側の緩斜面に2基の窯跡が並行して位置している。そのうち北側の1基は、南西から北東に主軸をもつ、全長約33m、幅4mから5m、勾配20度、南西側に焚口をもつ窯と推定される。近年まで20m前後の窯と推定されていたが、詳細に観察した結果、忌部神社から西側の墓地に通じる散策道よりも、北東側へも凹面が延伸しており、一連の窯と考えた方がよいと判断した。一説にはこの窯を「応永の大窯」とよび、築窯を室町中期とみるむきもある。

並行する南側の1基は、忌部神社のほぼ真西に位置する。主軸は南西から北東方向で、焚口は南西側、全長25m前後、幅5m前後、勾配17度と推定される。築窯は中世末ないし近世初頭と考えられている。北側の窯とこの窯の間には、全長18m、幅6mから8m、深さ2mから3mのくぼみがあり、窯を保護するための溝と考えられる。樹木が繁茂していたころ、この溝を窯跡と誤認していた可能性もあり、説明板に4基の窯と表示してあるのはこのことに起因する。

2基の並行する窯の南東方向へ50mほど離れた地点にもう1基の窯跡が所在する。この窯跡は天津神社から忌部神社への参道のコンクリート舗装によって分断はされてはいるが、上半分が比較的の残存しており、南東隅部に立ちあがり約1mの窯壁が露出している。想定の域を出ないが、幅5m前後、全長20m以上、勾配13度、焚口を南西側にもつ窯があるとみられる。最近の書籍〔備前市文化協会1998〕には、この窯の開始を文政6(1818)年と明示したものがある。

天津神社からの参道は、この窯のすぐ北側で左右に分かれ、右側は忌部神社方向へ、左側は天保窯方面に向かう。北東から南西方向に下るこの参道と、先ほどの北側2基の窯の間には、50m×30mほどの空間があるが、ここには高さが数mにもおよぶ巨大な物原が形成されている。どの窯の物原か不明ではあるが、物原の大規模な整理行為が行われたかどうかなども含めて、検討していく必要がある。

2. 表面採取遺物

図化したものは、全部で27点である。主に物原から表面採取した遺物である。

101から114、128～131はすべて徳利である。101は、胴部に布袋の型を貼り付けている上、他の徳利片が溶着している人形徳利。102は小型の徳利。108は保命酒の容器などとして多量に用いられた角徳利。110、112～114は底部に陶印がある。128～131は胴部に布袋などの型を貼り付けた人形徳利で

ある。

115～118は擂鉢である。116、118は17世紀の半ばから後半の年代が推定される。115、117は18世紀後半。119は台付平鉢、120～124は壺類で、121、122は法量が定量化したもの。124は大型品で近世末か。125は油壺。126、127ともに窯道具。126は大型角形匣鉢の底部に灯明受皿を重ね焼した物が溶着したもの。同様に127も小型の丸形匣鉢の底部に灯明受皿が10枚程度溶着したもの。

第2節 西大窯跡の概要と表面採取遺物

本節は平成17年に実施した測量結果と地形観察をもとに西大窯跡についての知見をまとめたものである。その際、平成4(1992)年、平成13(2001)年、平成17(2005)年に随時表面採取した遺物を図化することにより、築窯時期の推定資料とした。

1. 西大窯跡の概要

西大窯跡は医王山（標高301.4m）の東側斜面に位置している。窯跡の東側前面には畠地が広がり、窯跡面との比高差が約3～4mある。法面は人工的なもので、戦時中、耐火煉瓦会社が大量の陶片を煉瓦の原材料にした時、削平されたものと推定される。市指定地内は東側前面に平坦部が広がり、南側窯跡部分は緩斜面である。指定地北側部分は、削平が西側中央付近まで及んでいる。

指定地前面には大量の備前焼片や窯壁片が散在している。指定地の南側も東側同様、比高差が4～5mある人工的な法面になっており、前面には現代の墓地群が広がる。

指定地のほぼ南側半分には、主軸を東南東から西北西方向にとる凹面が観察され、一部には窯壁も地表面に露出している。これらからこの地点に、全長37m、最大幅5m、勾配15度前後の大窯が想定される。焚口と想定される部分東側には平坦部があり、煙出部分も明確に確認できることから、窯全体が良好な状態で保存されていることが予測できる。通常、このような大窯の両側には、物原（窯道具や不良品を廃棄した場所）が形成されるが、明確な盛上りは確認できない。ただ大窯の南側、煙出しに近い地点に多少密に陶片が堆積している箇所が確認できる。

大窯から北東側約12mの地点に幅2m、全長3m程度の凹部と、北東側約18mの地点に幅4m、全長3m程度の凹部が観察できる。いずれも樹木が繁茂した中であるため、全体地形等の観察ができないが、これらも窯跡ないし窯跡に関係するなんらかの遺構と考えられる。

2. 表面採取遺物

図化したものは、全部で48点である。1から17は主に市指定地内の東側平坦部、18から29は南側の陶片密集部、30から48は人工的な法面から崩落したものを表面採取したものである。したがって資料的には、さまざまな窯の遺物が混在した形になり厳密さを欠くが、築窯時期など全体の傾向を読み取ることで可能と考え資料化した。

1から5は徳利で、3から5の底部には陶印がある。1はらっきょ形で、胴部には細かな条線が施されている。6は擂鉢の口縁部が溶着した破片である。時期は17世紀代半ばぐらい。7は口径が9.0cmの灯明受皿、8は平鉢である。9は蓋のつまみ、10は胴部に菊文を貼り付けた甕。11から16はすべて窯道具で、11は大型の丸形匣鉢、12から15は「普遍的にみられる小型の丸形匣鉢」でいずれも胴部に窯印が施される。15は底部に丸形の陶板が溶着している。16は2枚の陶板が溶着したもので、

底部には大型の丸形匣鉢との溶着痕と、剥離のためか纏維状の痕跡が残る。上面には小型の丸形匣鉢を複数個規則的に並べた痕跡がある。17は擂鉢で、17世紀中から後半ぐらい。

18から21は徳利で、18は布袋を貼り付けた人形徳利である。20はその口徑から大型のかぶら徳利か。22から25は灯明受皿で、いずれもかえりをもつ。26は台付灯明受皿で、底部に陶印がある。27は鉢で、28は蓋である。29は油壺。30から40は擂鉢片で、37は口縁部の溶着片。いずれも17世紀代中ごろから後半と考えられるが、34は16世紀代前半。41から43は壺甕類である。44から48は窯道具で、中～大型品を焼く焼台である。

遺物は全体的に17世紀代の製品の割合が多い。

第3節 文献資料と絵図

西大窯、北大窯に関する文献や絵図について若干の整理をしてみたい。

延宝8(1680)年、従来窯(長さ二十五間、幅二間二尺、高さ六尺)を長さ十七間、幅一間二尺、高さ五尺八寸に改め、従来ある三窯で年間七度焼いていたのを十四回焼く許可を藩に求めた記録が「御留帳評定書」という池田家の藩政記録のなかにある。窯に関する初出の文献と考えられている。どの窯をさしているか不明であるが、北大窯、西大窯、南大窯を総称したものと考えるほうが自然であろう。この文献からは大窯が操業されていて、この期には改修段階に入っている様子がわかる。その後、同じ文献の中に、天和2(1682)年、新小釜の規格がきまり運上金を定めたとの記事がある。

備前岡山藩の藩政執行に関する記録をまとめた「撮要録」の「工商の部」の中にも、宝永8(1711)年、享保元(1715)年、享保5(1720)年、天保11(1840)年、天保13(1842)年などに窯の改修などの記事が見られる。最終的に明治6(1873)年に北大窯は廢窯になる。これらの文献については表1に整理してある。

備前焼の窯跡が描かれている絵図については、宝曆年間(1751～1764)ごろ作成された「中国行程記」〔註2〕と嘉永元(1848)年に作成された天津神社所有の絵図がある。

「中国行程記」には、現在の南大窯跡、北大窯跡、西大窯跡の位置にそれぞれ1基ずつ「焼物竈」として描かれている。どの窯も同じ筆致で切妻風の覆屋が描かれているが、窯本体は覆屋に隠れて判然としない。

嘉永元年の天津神社所有の絵図には、中国行程記と同様に3基の窯が描かれている。異なるのは覆屋がない窯があり、窯本体をかなり詳細に描写している点である。

北大窯は天津神社の左側に1基、焚口を右下方にして描かれている。わら屋根風の覆屋がかけられているが、焚口部分は覆われていない。屋根と地面が接する部分には、規則的に点状のものが確認でき、構造材である可能性がある。

南大窯は絵図下方に描かれている。焼成中なのか、焚口付近は赤色に塗られていて、煙出付近から煙が立ち昇っている。片側には薪の差木口なのか、規則的に小穴が配置されている。

西大窯は絵図左上方に、焚口を左側に向け、地面のうえにかなり盛り上がるようなかたちで描写されている。南大窯同様片側に規則的に小穴が配置されている。焼成直後なのか、窯の両側には、陶片が3から4箇所のまとまりをもって描かれている。

西暦	元号	内 容	該当案名	文 獻
1680	寛宝8	従来窯(長さ二十五間、幅二間二尺、高さ六尺)を長さ十七間、幅一間二尺、高さ五尺五寸に改め、従来ある三窯で年間七度焼いていたのを十四回焼く許可をして欲しいと願い出て、ためし物をする。	二大窯	御留板評定書
1682	天和2	新小窯(長さ十八間、幅五尺一寸五分)の運上金を六十日に定める	三大窯	御留板評定書
1687	貞享4	開谷学校の瓦窯に請接して小窯で祭器や工芸品を焼成	開谷窯業	留帳
1691	元禄4	藩により監目禁止		備要録
1709	宝永6	伊那 駿四つあり、各間二十間に、二間窯に横しきり有り、一間一間に窯育り	二大窯	和気頼
1711	宝永8	大窯の一分の一の大ききの小窯を焼きたい旨の願い出、陶工三十名名瀬者		摺衷錄
1711	正徳元	白備前を改めて、窯底く	白備前	摺衷錄
1713	正徳3	備前燒の段位を2から3割引上げ		摺衷錄
1715	正徳5	彩色焼始まる 燐野村野二郎、伊那彩色御用仰せ付けられる	彩色燒前	狩野二郎率公吉
1715	享保元	十官を製造する窯が堅かれる 砧谷半右衛門に繩方御用仰せ付けられる	上管窯	摺衷錄・奉公書
1715	享保元	白焼窯を改修する	白備前	立会御評定留帳
1720	享保5	北大窯を3分の2(火穴12番を4番紙)の大きさにしたいと申し出	北大窯	摺衷錄
1721	享保6	土官の焼段を値上げ	上管窯	摺衷錄
1781~	天保年間	天保を候く 窯其後今四つあり、各長廿・間横二間高七尺計	二大窯	東漸郡村誌
1790	天明9	伊那の陶工が野花島でお庭焼		木村家文書
1821	文政4	金間放 定日10日出 西長サ 六寸ニ小穴 武拾式呂同 同十一口出 北長サ 六寸十二ニ小穴 武拾四間 内ヨコ中 一丈五尺程高サ八尺程フツ外蓋モ右ニ頭申候 同十一口出 南長サ 六寸十二小穴 武拾八間	西大窯 北大窯 南大窯	木村家文書(弓川は松又二郎1982『耕刻御前焼二号より』)
1831	天保2	天保窯開業。発起人木村長十郎、木村左介、木村新七郎、森川兵庫、木村傳三郎、木村幸衛門、森基五郎の7名。角徳利や古備前守等が主力顧客。昭和16、10年ごろまで使用。	天保窯	森家墓碑
1840	天保11	第一、第二の天保窯を構成祓して落成。	天保窯	融通講規定
1842	天保13	北窯二間床埋めをする	天保窯	木村家文書
1842	天保13	西窯も二間床埋めの前の山	天保窯	木村家文書
1843	天保14	南の窯 塵 武拾八間 横幅 壱丈八尺 北の窯 塘 武拾六間 同 壱丈六尺 西の窯 塘 武拾四間 同 壱丈六尺 小窯今相馬候ハ 総ハ 八間半 横幅 壱丈四尺	南大窯 北大窯 西大窯 天保窯	南大窯 北大窯 西大窯 天保窯 陶器总瓶小釜焼感想
1849	嘉永2	木村平八郎泰式、「吉伊那神社絵」作行。窯元八姓の初出		古伊那神社絵
1873	明治6	北窯を廃す。天保窯の東側に森吉太郎らが明治窯を築く	明治窯	岡上為石西門1925『備前陶窯誌』大塚工藝社
1877	明治10	後藤貢三、大瀬為五郎、行木伝三郎らが陶器改良所をつくり「黄蘿窯」を築窯		松又二郎1976『明治の備前焼』奥山書店
1887	明治20	森琳三が備前ではじめて個人窯を築窯	個人窯	松又二郎1977『明治の備前焼』奥山書店

表1 窯関連文献一覧

両絵図には100年ぐらいの開きがあるが、このように相当量の情報をもっていることが判明した。宝暦年間ごろには、すべての窯に覆屋があったが、嘉永年間ごろになると村の経済が逼迫しているのか覆屋がないものがある。また、陶片のまとまりから窯には焚口以外にも、横側から製品を出し入れする入口があったことが想定される。窯の大部分は地上に描かれており、いわゆる「地上式」だったことが推測される。

【註】

- (1) 陶祖天太玉命を祀る。備前焼関係者が崇拝する社。窯元六姓が祀り、毎年5月15日に備前焼陶友会会員らが参列して例祭が行われる。もともとこの場所には小祠があったが、昭和4(1929)年、伊勢神宮の式年遷宮の際の古嚴社が下付され、現在の建物が建てられた。
- (2) 長門萩蒲の絵師である有馬喜惣太(1708~1769)らが毛利家の参勤交代の事前調査のため作成した絵図で、縮尺は約8000分の1程度。街道の両側には名所や旧跡が描かれ、美しい絵巻物になっている。

【引用】

備前市文化協会1998『わがまちの文化遺産』記念誌編集委員会

第4章 まとめ

西大窯跡、北大窯跡は、ともに近世の備前焼を代表する大窯で、国指定史跡伊部南大窯跡同様、近世備前焼の生産体制を考えるうえで重要な遺跡であることはいうまでもない。

西大窯跡については、全長約37m、最大幅5m、勾配15度前後の大窯が良好な状態で保存されていることが判明した。その北側にも窯跡と推定される箇所が2箇所あるが、今回の測量では判然としなかった。この大窯の操業時期については、擂鉢や窯道具などの表採状況から17世紀代が中心と考えられる。このほかにも16世紀前後の擂鉢片や江戸期後半の遺物も散見されるため、江戸期を中心に連続と操業が行われた窯跡群と想定される。

北大窯跡は、現在のところ3基の窯跡と巨大な物原で構成されていることが確認できた。北側が全長33m、幅4mから5m、勾配20度の大窯で、中央が全長25m前後、幅5m前後、勾配17度の窯になる。巨大な物原をはさんでその南側に、全長20m以上、幅5m前後、勾配13度の大窯が位置する。3基の窯跡の操業時期についての詳細は不明である。表面採取遺物はその主なものが巨大な物原からなので、各窯の操業時期について言及するのが困難である。しかし、17世紀半ばから後半の遺物が物原に目立っている点、窯の規模、南側の窯の露出した壁の様子、文献などから、北側から南側へ順次操業が移っていったと考えるのが妥当なようである。北大窯跡も、西大窯跡同様に江戸期を中心に連続と操業が行われた窯跡群といえる。

12世紀代のある時期、須恵器窯と大差ない全長10m前後、幅1.5m前後の窯で備前焼は生産を開始する。南北朝期の終わりごろには全長20m、幅2.1～2.5mのやや大型化した窯を丘陵先端部や山裾部に築くようになる。この時期は、西日本において備前焼が国産陶磁器の需要を独占するようになる。室町時代前半の不老山東口窯跡の段階では、天井をささえる土柱構造が現れ、以後の大形の窯構造の流れをつくるとともに、量産化を押し進める。16世紀終わりごろには、爆発的な器種の増加、南・北・西への窯場の集約がおこるとともに、大型化した窯と並行して特定の器種のみ多量に焼成する小形窯が出現する。これは消費側の需要の変化、為政者の干渉など外的要因が考えられる。

17世紀には、流通圏域の急激な縮小が関係するのか、窯が小形化するゆり戻し現象が起こるが、17世紀終わりごろには備前最大の窯ができ、ほぼ時期を同じくして「御用窯」の閑谷焼窯跡が閑谷学校建設にともなって築営される。閑谷焼窯は連房式窯であるが、備前焼の中心生産地である伊部の地にはその形式は、150年間も普及しなかったといわれている。ようやく天保年間（1829～）には「融通窯」とよばれる連房式窯が合計3基築かれ、人形徳利や角徳利といった商品価値の高い商品を中心にして窯業が営まれる。このとき大形の窯は完全に廃れたわけではなく、窯規模の縮小、焼成回数の削減などをいながら、明治初年頃まで焼きつがれていった。

こうした備前焼の生産面を整理する中で、16世紀の終わりごろの窯場の集約、つまり伊部南大窯、北大窯、西大窯への生産の集約は備前焼の歴史の中でも大きな変換点であり、それらを構成する窯跡群はその証として重要な遺跡である。したがって適切な保護をはかり、公開・活用をしながら後世に伝えていくことはわれわれの世代に与えられた責務であると考える。

表2 北大窯跡遺物觀察表（1）

番号	遺構名	出土場所	発掘日	復原	寸法	断面	基部	鉢内跡	高さ	地成	特徴・性質	成形・焼成	文様・記録・小字	備考
129	人形埴輪	北大内周櫛北	010610	同一部分	-	-	-	-	0.1~0.5mmの凹凸の痕跡を含む 内側: 1.5mmの厚板を含む	直筒	内壁: 1.5mm 外壁: 1.5mm 高さ: 2.2mm	直筒 内壁: 1.5mm 外壁: 1.5mm	(288)西	
130	人形埴輪	北大内周櫛北	010610	同一部分	-	-	-	-	0.1~0.5mmの凹凸の痕跡を含む 内側: 1.5mmの厚板を含む	直筒	内壁: 1.5mm 外壁: 2.2mm 高さ: 1.5mm	直筒 内壁: 1.5mm 外壁: 2.2mm		
131	人形埴輪	北大内周櫛北	010610	同一部分	-	-	-	-	0.1~0.5mmの凹凸の痕跡を含む 内側: 1.5mmの厚板を含む	直筒	内壁: 1.5mm 外壁: 1.5mm	直筒 内壁: 1.5mm 外壁: 1.5mm		

表2 北大墓跡遺物観察表(2)

番号	基盤	出土場所	基部形	直径	寸法	断面	地成	特徴	成形・焼成	文様・記録・小字	備考		
1	埴輪	西人内	010210	筒型のみ	3.0	3.0	-	0.1~0.5mmの凹凸の痕跡を含む 内側: 1.5mmの厚板を含む	直筒	内壁: 1.5mm 外壁: 1.5mm 高さ: 1.5mm	直筒 内壁: 1.5mm 外壁: 1.5mm		
2	人形埴輪	西人内	010210	筒型から斜面	3.0	6.0	10.0	0.1~0.5mmの凹凸の痕跡を含む 内側: 1.5mmの厚板を含む	直筒	内壁: 1.5mm 外壁: 1.5mm 高さ: 1.5mm	直筒 内壁: 1.5mm 外壁: 1.5mm		
3	埴輪	西人内	010210	筒型のみ	3.0	6.0	10.0	0.1~0.5mmの凹凸の痕跡を含む 内側: 1.5mmの厚板を含む	直筒	内壁: 1.5mm 外壁: 1.5mm 高さ: 1.5mm	直筒 内壁: 1.5mm 外壁: 1.5mm		
4	埴輪	西人内	010210	筒型から斜面	3.0	7.0	-	0.1~0.5mmの凹凸の痕跡を含む	直筒	内壁: 1.5mm 外壁: 1.5mm 高さ: 1.5mm	直筒 内壁: 1.5mm 外壁: 1.5mm		
5	埴輪	西人内	010210	筒型のみ	-	6.0	6.0	0.1~0.5mmの凹凸の痕跡を含む 内側: 1.5mmの厚板を含む	直筒	内壁: 1.5mm 外壁: 1.5mm 高さ: 1.5mm	直筒 内壁: 1.5mm 外壁: 1.5mm		
6	埴輪	西人内	010210	筒型のみ	1.5	1.5	6.0	0.1~1.5mmの凹凸の痕跡を含む 内側: 1.5mmの厚板を含む	直筒	内壁: 1.5mm 外壁: 1.5mm 高さ: 1.5mm	直筒 内壁: 1.5mm 外壁: 1.5mm	中筋 内壁: 1.5mm 外壁: 1.5mm	
7	埴輪	西人内	010210	筒型のみ	1.5	1.5	6.0	0.1~1.5mmの凹凸の痕跡を含む 内側: 1.5mmの厚板を含む	直筒	内壁: 1.5mm 外壁: 1.5mm 高さ: 1.5mm	直筒 内壁: 1.5mm 外壁: 1.5mm	中筋 内壁: 1.5mm 外壁: 1.5mm	
8	埴輪	西人内	010210	筒型のみ	1.5	1.5	6.0	0.1~1.5mmの凹凸の痕跡を含む 内側: 1.5mmの厚板を含む	直筒	内壁: 1.5mm 外壁: 1.5mm 高さ: 1.5mm	直筒 内壁: 1.5mm 外壁: 1.5mm		
9	埴輪	西人内	010210	筒型のみ	1.5	1.5	6.0	0.1~1.5mmの凹凸の痕跡を含む 内側: 1.5mmの厚板を含む	直筒	内壁: 1.5mm 外壁: 1.5mm 高さ: 1.5mm	直筒 内壁: 1.5mm 外壁: 1.5mm		
10	埴輪	西人内	010210	筒型のみ	1.5	1.5	6.0	0.1~1.5mmの凹凸の痕跡を含む 内側: 1.5mmの厚板を含む	直筒	内壁: 1.5mm 外壁: 1.5mm 高さ: 1.5mm	直筒 内壁: 1.5mm 外壁: 1.5mm		
11	埴輪	西人内	010210	筒型のみ	1.5	1.5	6.0	0.1~1.5mmの凹凸の痕跡を含む 内側: 1.5mmの厚板を含む	直筒	内壁: 1.5mm 外壁: 1.5mm 高さ: 1.5mm	直筒 内壁: 1.5mm 外壁: 1.5mm	ラジカルなタズイ	
12	埴輪	西人内	010210	筒型のみ	1.5	1.5	6.0	0.1~1.5mmの凹凸の痕跡を含む 内側: 1.5mmの厚板を含む	直筒	内壁: 1.5mm 外壁: 1.5mm 高さ: 1.5mm	直筒 内壁: 1.5mm 外壁: 1.5mm		
13	埴輪	西人内	010210	筒型のみ	1.5	1.5	6.0	0.1~1.5mmの凹凸の痕跡を含む 内側: 1.5mmの厚板を含む	直筒	内壁: 1.5mm 外壁: 1.5mm 高さ: 1.5mm	直筒 内壁: 1.5mm 外壁: 1.5mm		
14	埴輪	西人内	010210	筒型のみ	1.5	1.5	6.0	0.1~1.5mmの凹凸の痕跡を含む 内側: 1.5mmの厚板を含む	直筒	内壁: 1.5mm 外壁: 1.5mm 高さ: 1.5mm	直筒 内壁: 1.5mm 外壁: 1.5mm		
15	埴輪	西人内	010210	筒型のみ	1.5	1.5	6.0	0.1~1.5mmの凹凸の痕跡を含む 内側: 1.5mmの厚板を含む	直筒	内壁: 1.5mm 外壁: 1.5mm 高さ: 1.5mm	直筒 内壁: 1.5mm 外壁: 1.5mm	中筋 内壁: 1.5mm 外壁: 1.5mm	
16	埴輪	西人内	010210	筒型のみ	1.5	1.5	6.0	0.1~1.5mmの凹凸の痕跡を含む 内側: 1.5mmの厚板を含む	直筒	内壁: 1.5mm 外壁: 1.5mm 高さ: 1.5mm	直筒 内壁: 1.5mm 外壁: 1.5mm	中筋 内壁: 1.5mm 外壁: 1.5mm	
17	埴輪	西人内	010210	筒型のみ	1.5	1.5	6.0	0.1~1.5mmの凹凸の痕跡を含む 内側: 1.5mmの厚板を含む	直筒	内壁: 1.5mm 外壁: 1.5mm 高さ: 1.5mm	直筒 内壁: 1.5mm 外壁: 1.5mm	ラジカルなタズイ	
18	人形埴輪	西人内	010210	筒型のみ	2.0	2.0	-	0.1~1.5mmの凹凸の痕跡を含む 内側: 1.5mmの厚板を含む	直筒	内壁: 1.5mm 外壁: 1.5mm 高さ: 1.5mm	直筒 内壁: 1.5mm 外壁: 1.5mm	中筋 内壁: 1.5mm 外壁: 1.5mm	
19	埴輪	西人内	010210	筒型のみ	2.0	2.0	-	0.1~1.5mmの凹凸の痕跡を含む 内側: 1.5mmの厚板を含む	直筒	内壁: 1.5mm 外壁: 1.5mm 高さ: 1.5mm	直筒 内壁: 1.5mm 外壁: 1.5mm		
20	埴輪	西人内	010210	筒型のみ	2.0	2.0	-	0.1~1.5mmの凹凸の痕跡を含む 内側: 1.5mmの厚板を含む	直筒	内壁: 1.5mm 外壁: 1.5mm 高さ: 1.5mm	直筒 内壁: 1.5mm 外壁: 1.5mm		
21	埴輪	西人内	010210	筒型のみ	2.0	2.0	-	0.1~1.5mmの凹凸の痕跡を含む 内側: 1.5mmの厚板を含む	直筒	内壁: 1.5mm 外壁: 1.5mm 高さ: 1.5mm	直筒 内壁: 1.5mm 外壁: 1.5mm		
22	埴輪	西人内	010210	筒型のみ	2.0	2.0	-	0.1~1.5mmの凹凸の痕跡を含む 内側: 1.5mmの厚板を含む	直筒	内壁: 1.5mm 外壁: 1.5mm 高さ: 1.5mm	直筒 内壁: 1.5mm 外壁: 1.5mm	中筋 内壁: 1.5mm 外壁: 1.5mm	

表3 西大墓跡遺物観察表(1)

番号	基盤	出土箇所	発見月	成層別	深度	測定	坑深	基盤	地質	地質・岩相		地層・地質	実施・監視日	解説
										層厚	層名			
23	C帯	西大窓門	08/200	L3	-	5.0	10	10	8.7	0.1mm位の白色粘土を含む	白泥	内層：10m 5.4% 塩分 外層：10m 5.4% 塩分	-	-
24	砂質泥炭	西大窓門	08/200	L3	7.3	0.8	5.3	7.4	0.1~0.5mm位の白色粘土を含む	白泥	内層：10m 5.4% 塩分 外層：10m 4.6% 塩分	-	-	
25	砂質土	西大窓門	08/200	L3	-	8.1	8.9	4.7	9.4	0.1mm位の白色粘土を含む	白泥	内層：10m 5.6% 塩分 外層：10m 5.6% 塩分	-	-
26	含水砂質土	西大窓門	08/200	L3	-	4.5	5.9	3.9	5.8	0.1mm位の白色粘土を含む 0.1mm位の白色粘土を含む	白泥	内層：10m 4.4% 塩分 外層：10m 4.4% 塩分	-	-
27	含水砂質土	西大窓門	08/200	L3/L5	36.0	(34)	-	26.4	0.1mm位の白色粘土を含む 0.1mm位の白色粘土を含む	白泥	内層：10m 4.4% 塩分 外層：10m 4.4% 塩分	ADT 10m 剥離	-	
28	土	西大窓門	08/200	L3/L5	-	-	0.1	-	14.5	0.1mm位の白色粘土を含む	白泥	内層：10m 4.7% 塩分 外層：10m 4.7% 塩分	-	-
29	砂質土	西大窓門	08/200	L3	-	1.9	4.3	5.8	11.4	0.1mm位の白色粘土を含む 0.1mm位の白色粘土を含む	白泥	内層：10m 5.4% 塩分 外層：10m 5.4% 塩分	-	-
30	砂質土	西大窓門	08/200	L3/L5	3.7	10.8	13.1	10.8	0.1~1.0mm位の白色粘土を含む 0.2~1.0mm位の白色粘土を含む	白泥	内層：10m 5.4% 塩分 外層：10m 5.4% 塩分	-	-	
31	砂質土	西大窓門	08/200	L3/L5	35.3	20.0	-	54.0	0.1~1.0mm位の白色粘土を含む 0.2~1.0mm位の白色粘土を含む	白泥	内層：10m 5.4% 塩分 外層：10m 4.4% 塩分 4.2% 鹿糞	ナリ層：25mm 厚 14m	-	
32	純粘土	西大窓門	08/200	L3/L5	31.0	(20)	-	18.2	0.1~0.5mm位の白色粘土を含む 0.1~0.5mm位の白色粘土を含む	白泥	内層：10m 5.4% 塩分 外層：10m 5.4% 塩分	ナリ層：25mm 厚 14m	-	
33	純粘土	西大窓門	08/200	L3/L5	-	47.2	(1.7)	-	47.2	0.1~1.0mm位の白色粘土を含む 0.1~1.0mm位の白色粘土を含む	白泥	内層：10m 5.2% 塩分 外層：10m 5.2% 塩分 (ナリ層)	ナリ層：25mm 厚 14m	-
34	砂質土	西大窓門	08/200	L3/L5	31.0	(3.0)	-	30.6	0.1~0.5mm位の白色粘土を含む 0.1~0.5mm位の白色粘土を含む	白泥	内層：10m 5.4% 塩分 外層：10m 5.4% 塩分	ナリ層：25mm 厚 14m	-	
35	砂質土	西大窓門	08/200	L3/L5	39.1	(7.0)	-	40.6	0.1~1.0mm位の白色粘土を含む 0.1~1.0mm位の白色粘土を含む	白泥	内層：10m 4.4% 塩分 外層：10m 5.6% 塩分	ナリ層：30mm 厚 14m	-	
36	砂質土	西大窓門	08/200	L3/L5	38.7	(7.7)	-	34.2	0.1~1.0mm位の白色粘土を含む 0.1~1.0mm位の白色粘土を含む	白泥	内層：10m 5.6% 塩分 外層：10m 5.6% 塩分	ナリ層：30mm 厚 14m	-	
37	砂質土	西大窓門	08/200	L3/L5	38.8	(8.0)	-	29.4	0.1~1.0mm位の白色粘土を含む 0.1~1.0mm位の白色粘土を含む	白泥	内層：10m 5.6% 塩分 外層：10m 5.6% 塩分 (ナリ層)	ナリ層：25mm 厚 14m	-	
38	砂質土	西大窓門	08/200	L3/L5	-	46.0	14.2	-	60.1	0.1~1.0mm位の白色粘土を含む 0.1~1.0mm位の白色粘土を含む	白泥	内層：10m 5.6% 塩分 外層：10m 5.6% 塩分	ナリ層：30mm 厚 14m	-
39	砂質土	西大窓門	08/200	L3/L5	-	46.0	14.2	-	60.1	0.1~1.0mm位の白色粘土を含む 0.1~1.0mm位の白色粘土を含む	白泥	内層：10m 5.6% 塩分 外層：10m 5.6% 塩分	ナリ層：30mm 厚 14m	-
40	砂質土	西大窓門	08/200	L3/L5	-	47.2	13.2	-	64.4	0.1~1.0mm位の白色粘土を含む 0.1~1.0mm位の白色粘土を含む	白泥	内層：10m 5.6% 塩分 外層：10m 5.6% 塩分	ナリ層：30mm 厚 14m	-
41	土	西大窓門	08/200	L3/L5	77.8	(8.0)	-	36.9	0.1~1.0mm位の白色粘土を含む	白泥	内層：10m 5.6% 塩分 外層：10m 5.6% 塩分	ナリ層：10m 厚 14m	-	
42	土	西大窓門	08/200	L3/L5	-	47.2	0.7	-	50.9	0.1~0.5mm位の白色粘土を含む 0.1~0.5mm位の白色粘土を含む	白泥	内層：10m 5.6% 塩分 外層：10m 5.6% 塩分	ナリ層：10mm 厚 14m	-
43	土	西大窓門	08/200	L3/L5	35.8	6.0	-	41.8	0.1~1.0mm位の白色粘土を含む 0.1~1.0mm位の白色粘土を含む	白泥	内層：10m 5.6% 塩分 外層：10m 5.6% 塩分	ナリ層：10mm 厚 14m	-	
44	泥炭質土	西大窓門	08/200	試掘のみ	-	11.0	22.0	10.8	54.0	0.1~1.0mm位の白色粘土を含む 0.1~1.0mm位の白色粘土を含む	白泥	内層：10m 5.6% 塩分 外層：10m 5.6% 塩分	ナリ層：10mm 厚 14m	-
45	泥炭質土	西大窓門	08/200	試掘のみ	-	12.1	16.5	12.4	23.6	0.1~1.0mm位の白色粘土を含む 0.1~1.0mm位の白色粘土を含む	白泥	内層：10m 5.6% 塩分 外層：10m 5.6% 塩分	ナリ層：10mm 厚 14m	-
46	泥炭質土	西大窓門	08/200	試掘のみ	-	12.1	16.5	12.4	23.6	0.1~1.0mm位の白色粘土を含む 0.1~1.0mm位の白色粘土を含む	白泥	内層：10m 5.6% 塩分 外層：10m 5.6% 塩分	ナリ層：10mm 厚 14m	-
47	泥炭質土	西大窓門	08/200	試掘のみ	-	12.1	16.5	12.4	23.6	0.1~1.0mm位の白色粘土を含む 0.1~1.0mm位の白色粘土を含む	白泥	内層：10m 5.6% 塩分 外層：10m 5.6% 塩分	ナリ層：10mm 厚 14m	-
48	泥炭質土	西大窓門	08/200	試掘のみ	-	12.1	16.5	12.4	23.6	0.1~1.0mm位の白色粘土を含む 0.1~1.0mm位の白色粘土を含む	白泥	内層：10m 5.6% 塩分 外層：10m 5.6% 塩分	ナリ層：10mm 厚 14m	-
49	泥炭質土	西大窓門	08/200	試掘のみ	-	12.1	16.5	12.4	23.6	0.1~1.0mm位の白色粘土を含む 0.1~1.0mm位の白色粘土を含む	白泥	内層：10m 5.6% 塩分 外層：10m 5.6% 塩分	ナリ層：10mm 厚 14m	-
50	泥炭質土	西大窓門	08/200	試掘のみ	-	12.1	16.5	12.4	23.6	0.1~1.0mm位の白色粘土を含む 0.1~1.0mm位の白色粘土を含む	白泥	内層：10m 5.6% 塩分 外層：10m 5.6% 塩分	ナリ層：10mm 厚 14m	-
51	泥炭質土	西大窓門	08/200	試掘のみ	-	12.1	16.5	12.4	23.6	0.1~1.0mm位の白色粘土を含む 0.1~1.0mm位の白色粘土を含む	白泥	内層：10m 5.6% 塩分 外層：10m 5.6% 塩分	ナリ層：10mm 厚 14m	-

表3 西大窓跡遺物観察表（2）

図面・図版



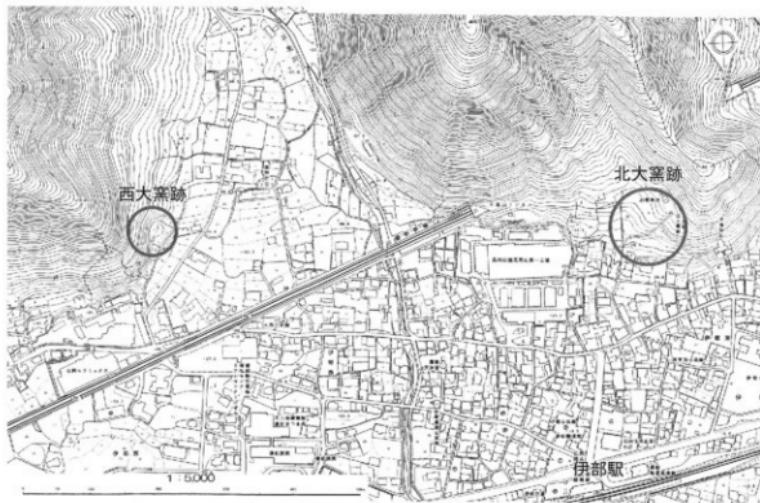
1. 西大窯に良好に残存する窯跡



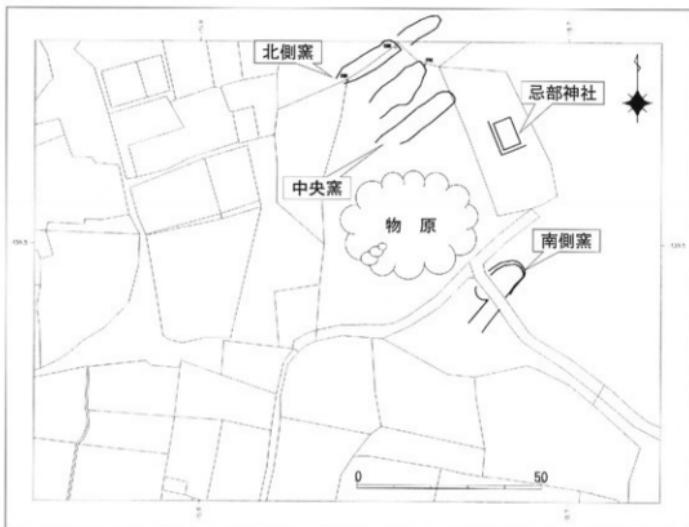
2. 北大窯の物原（写真中央）



3. 嘉永元年の絵図に描かれた南大窯



1. 北大窯跡・西大窯跡位置図



2. 備前市指定史跡「北大窯跡」現況図



1. 嘉永元年の絵図に描かれた北大窯跡

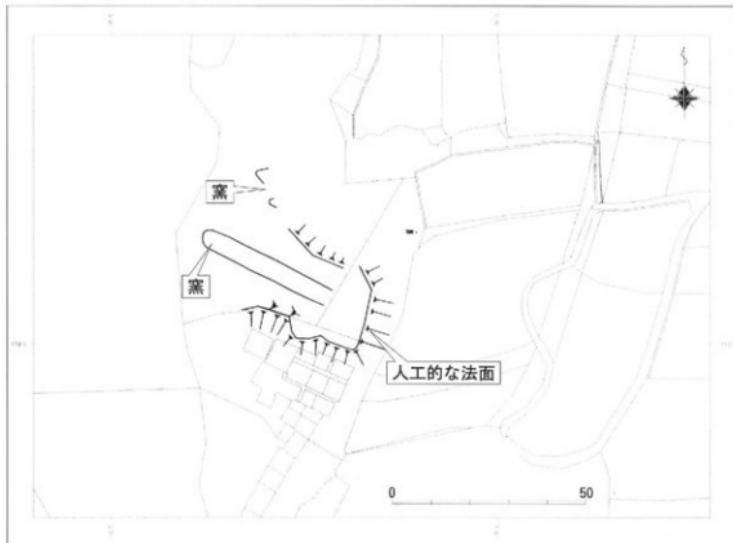


2. 北大窯跡（矢印部分手前が北側窯、奥が中央の窯）

図面 2



1. 北大窯跡・西大窯跡等位置図



2. 備前市指定史跡「西大窯跡」現況図

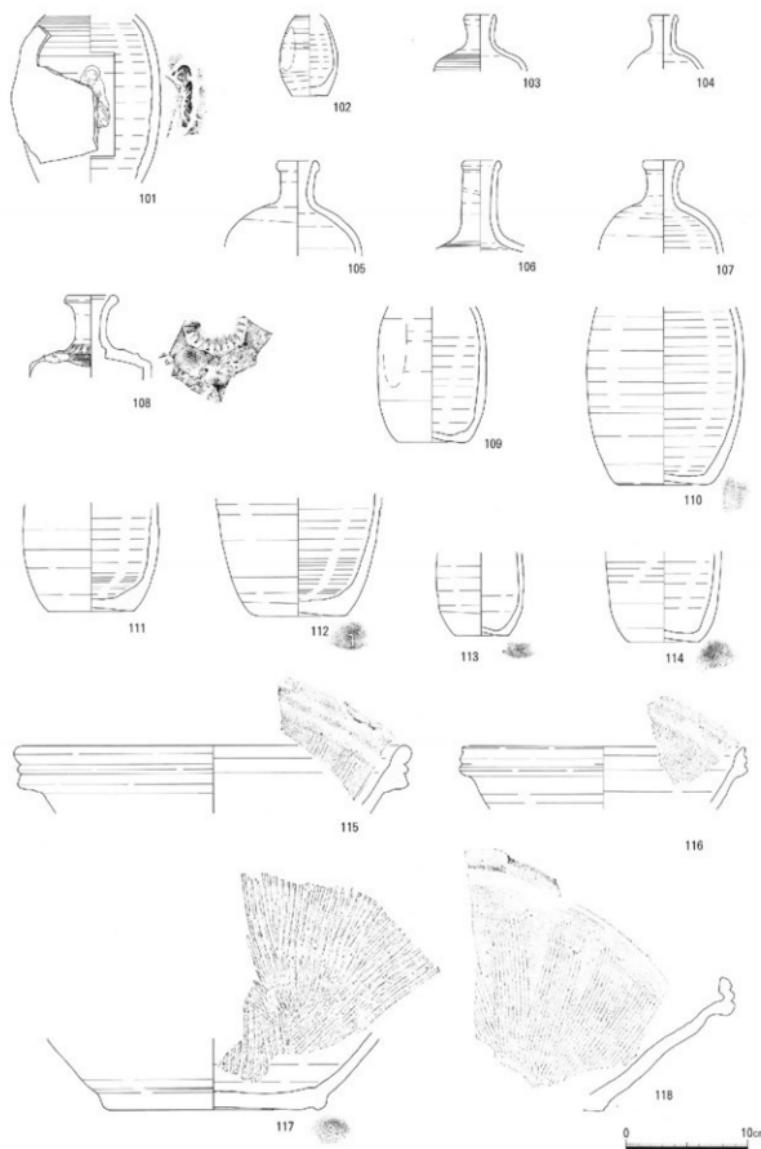


1. 嘉永元年の絵図に描かれた西大窯跡



2. 西大窯跡（東より・矢印が窯）

図面3

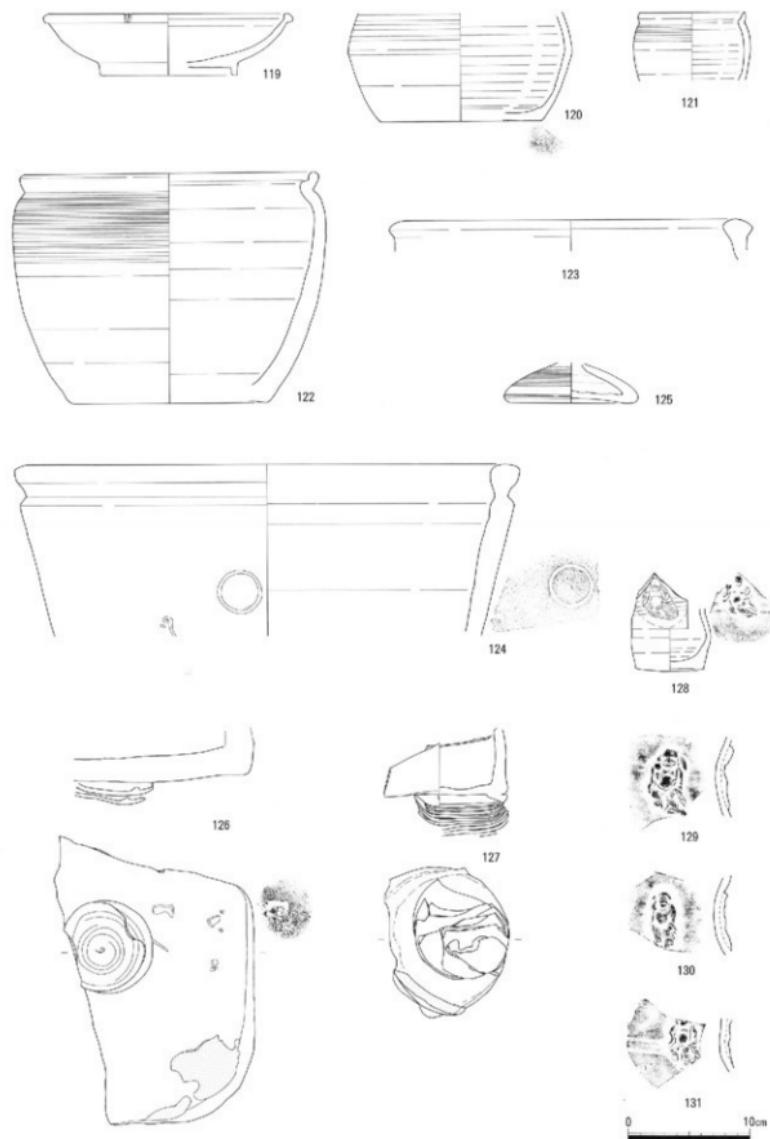


北大窯跡遺物図 1 (1/4)



北大窯跡遺物写真 1

図面 4

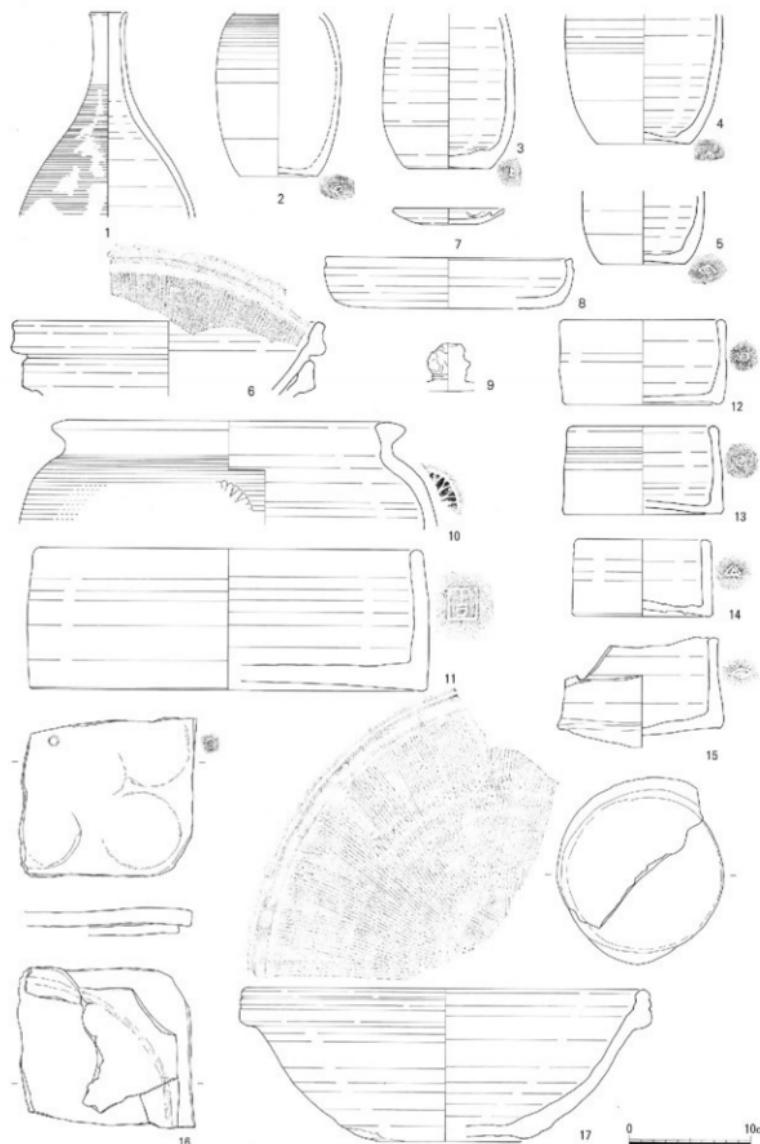


北大窯跡遺物図 2 (1/4)



北大窑跡遺物写真 2

図面5

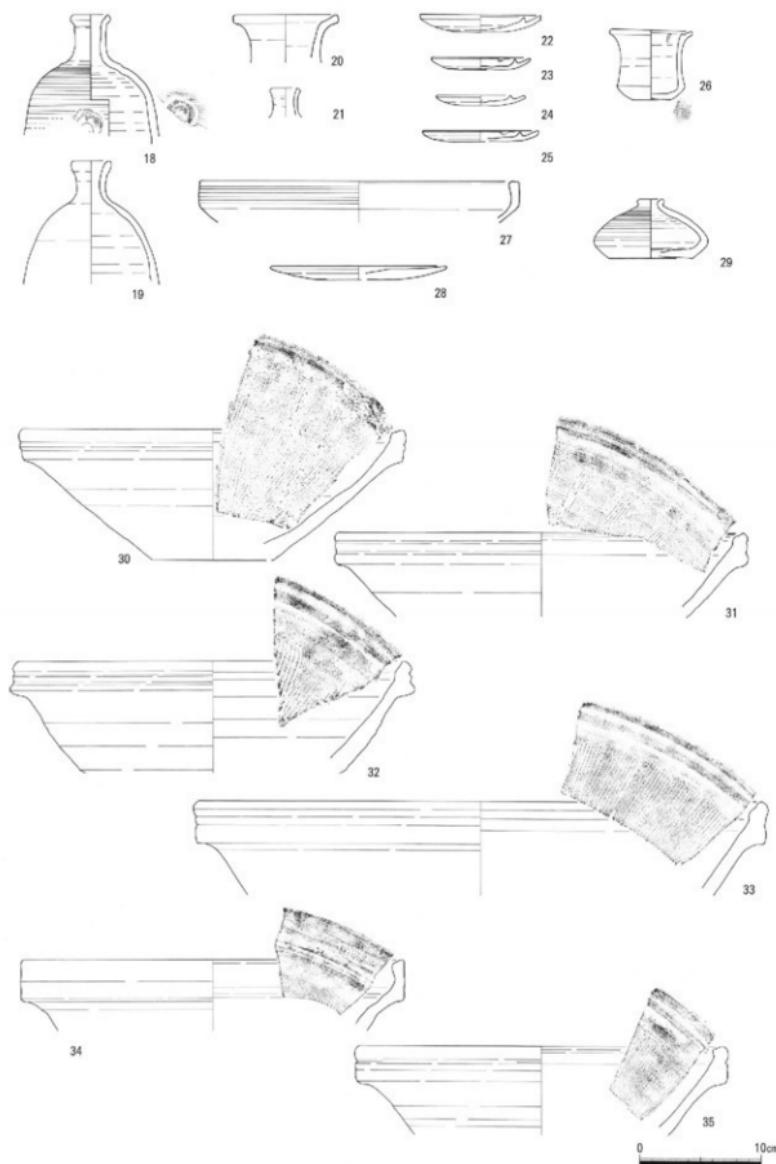


西大寺跡遺物図1 (1/4)



西大窯跡遺物写真 1

図面6

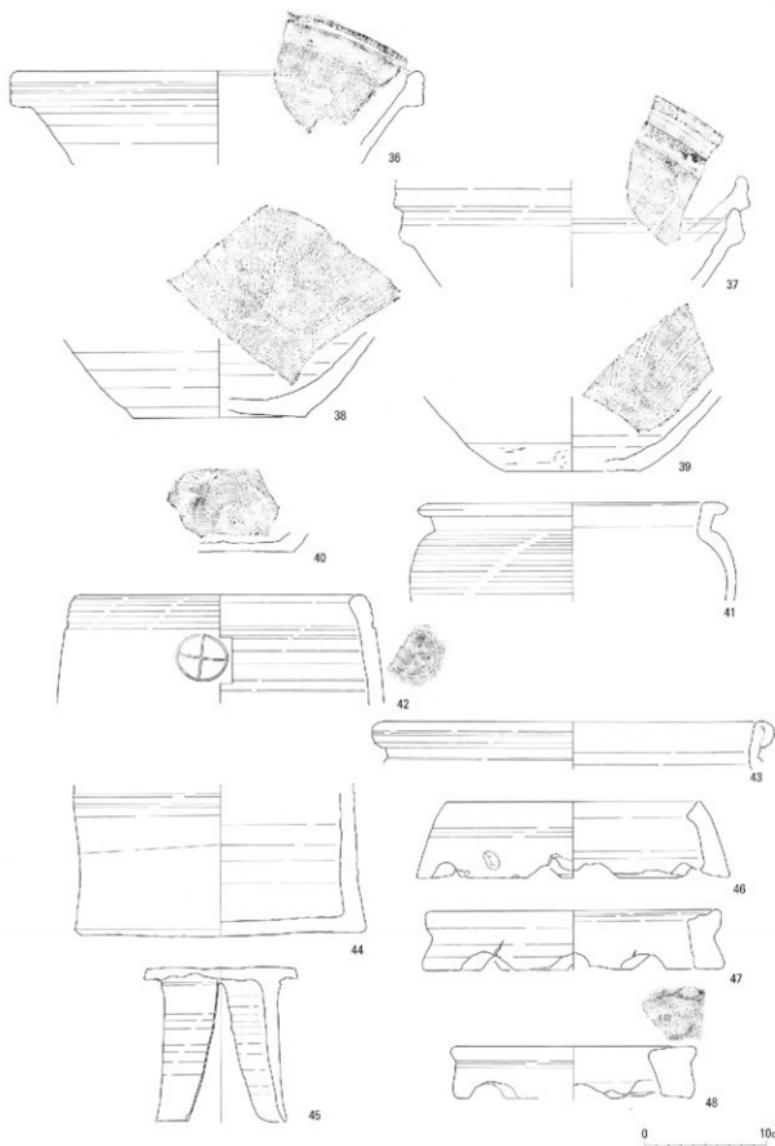


西大寺跡遺物図2 (1/4)



西大窯跡遺物写真2

図面 7



西大塚跡遺物図 3 (1/4) (42, 43:1/8)



西大窯跡遺物写真 3

報告書抄録

ふりがな	きたおおがまと・にしおおがまとちょうさがいほう						
書名	北大窯跡・西大窯跡調査概報						
シリーズ名	備前市埋蔵文化財調査報告						
シリーズ番号	6						
編著者名	石井 啓						
編集機関	岡山県備前市教育委員会						
所在地	〒705-8602 岡山県備前市東片上126 TEL 0869-64-1841 E-mail : syougai@city.bizen.okayama.jp						
発行年月日	西暦2006年3月20日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯 ° ′ ″ (日本測地系)	東経 ° ′ ″ (日本測地系)	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
きたおおがまと 北大窯跡	おかやまけん 岡山県 びぜん 備前市	224 33211	34° 44' 21"	134° 09' 51"	2004.7.1 2005.11.28	該当地の 測量のみ	指定のた めの資料 整備
にしおおがまと 西大窯跡	いんべ 伊部	208	34° 44' 21"	134° 09' 18"	2006.2.2		
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
北大窯跡	窯跡	近世が主体	窯跡3基 物原	備前焼片			
西大窯跡	窯跡	室町～近世	窯跡1基	備前焼片			

備前市埋蔵文化財調査報告6

北大窯跡・西大窯跡調査概報

平成18年3月20日 発行

編集・発行 備前市教育委員会生涯学習課
〒705-8602 岡山県備前市東片上126
TEL(0869)64-1841・FAX(0869)64-4285
mail /ayoungu@city.bizen.okayama.jp

印刷・製本 大西商店印刷部
岡山県備前市西片上82

